

感 *infection* 染

仙川 環

Senkawa Tamaki



小学館文庫

感^{かん}染^{せん}

著者 仙川環^{せんかわ たまき}

二〇〇五年九月一日
二〇〇七年十月三十日

初版第一刷発行
第十四刷発行

編集人 飯沼年昭
発行人 佐藤正治
発行所 株式会社 小学館

〒一〇一八〇〇一
東京都千代田区一ツ橋 一三二一
電話 編集〇三二三三三〇一五六一七
販売〇三二五二八一三三五五五
印刷所 図書印刷株式会社

©Tamaki Senkawa 2005

Printed in Japan

ISBN4-09-408046-5

造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、「制作局」(☎〇二二〇一三三六―三四〇)あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。(電話受付は土・日・祝日を除く九時三〇分―一七時三〇分までになります。)

〔R〕日本複写権センター委託出版物
本書の全部または一部を無断で複写(コピー)することは、著作権法上での例外を除いて禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(☎〇二三三四〇一―三三八二)にご連絡ください。

この文庫の詳しい内容はインターネットで24時間ご覧になれます。またネットを通じ書店あるいは宅急便ですぐご購入できます。
アドレス URL <http://www.shogakukan.co.jp>



小学館文庫

小学館文庫

感 染

仙川 環



小学館文庫

目次

感染

.....

6

解説

関口苑生

.....

295

感 染

1

手術室を出ると、仲沢啓介は大きく息を吐き出した。肩をぐるりと二度ばかりまわしてみる。首の後ろが熱を帯びていて熱い。難しい手術の後、決まってそこが熱くなる。

患者を乗せたストレッチャーを押した看護師が、廊下の端にあるエレベーターに乗り込むところだった。

水色のキャップを脱ぐと丸めてポケットに押し込んだ。廊下を照らす蛍光灯がまぶしくて、啓介は目を細めた。

「先生！」

背後から声をかけられた。スーツ姿の小柄な男が深々と頭を下げている。

「ありがとうございます。なんとお礼を申し上げればいいのか。社長にもしものがあつたら我が社は……」

男は顔をあげると、目元をひくひくとふるわせた。

さつき心臓のバイパス手術をした患者は社員五十人ほどの精密部品メーカーの創業

者だった。目の前にいる男は、番頭役の専務あたりだろうと見当をつける。

「あの、これほんのわずかですが」

男が上着の内ポケットから白い封筒を取り出した。厚みを目で確認する。

「気を遣っていたただかなくても結構です」

啓介が言うと、男は首を左右に振り、啓介の手に封筒を押し付けた。予想したとおりの行動だった。

「そうおっしゃらずに」

啓介はうなずいた。

「それでは遠慮なく」

男は安堵したように何度も頭を下げた。啓介は封筒をズボンのポケットに入れた。

「仲沢先生！」

シャワー室の手前で看護師に呼び止められて、啓介は足を止めた。

「謝礼を受け取るのは禁止されているじゃありませんか」

看護師はカルテを胸に抱えたまま、よく光る目で啓介を見上げた。

「どうしちゃったんですか？ 昔は先生、そんな人じゃなかったのに」

啓介は苦笑いを浮かべた。そういえばそんな頃もあった。が、今は奇麗ごとを言っ

ていられる場合ではない。金はあればあるほどありがたい。啓介は看護師から目を逸^{そら}らして言った。

「学部長の岸川先生に言いつけてみたらどうだ？ どうせ無駄だと思いがね。ほかのドクターだって同じようなことをしているんだから」

看護師の頬^{ほほ}がさっと紅潮した。猫のような目で啓介をにらみつけてくる。啓介は首の後ろを手で揉^もむと、シャワー室の扉を押した。

2

洗面台の鏡に映った自分と目を合わせる。何かに怯^{おび}えたような目。不安げな表情が自分でも嫌になる。平凡な顔立ちだということは、自覚している。それでも昔は、表情から意志の強さを読み取ることができた。今、鏡の中を探してもそんな自分はどこにもいない。

仲沢葉月はため息をつく、化粧水の瓶を手に取り、とろりとした液体をコットンにしみこませた。

丁寧に頬をぬぐう。目元にも化粧水を叩き込む。リズミカルに手を動かしているうちに、涙がにじんできた。

啓介は何故、自分と結婚したのだろう。今さらながらそう思う。結婚を自分から口にしたことはない。そんなことができるはずもなかった。啓介には妻と三歳の子供がいた。

リビングルームのソファに坐ると葉月は煙草に火をつけた。啓介と結婚する前のことを思い返す。仲沢啓介という外科医の名は、東都大学に来る前から知っていた。アメリカで臓器移植を手がけていたこともある高名な医師の名は、医学雑誌だけでなく新聞にも取り上げられていた。その彼がウイルス研究を専門としている葉月に教えを請いに来たときには驚いたが、話を聞いて納得した。移植後の患者は免疫抑制剤を服用するから、さまざまな感染症の危険にさらされる。最新の知識を得たいといつて、週に一度ほど夜の比較的暇な時間、啓介は葉月のところに話をしにくるようになった。長身でどちらかと言うとごつい体つきの啓介が、白衣の背中を丸めて葉月が指し示す論文のデータに見入る姿は好ましかった。固そうな髪をかきあげながら、真剣な表情で質問をしてくる彼からは、第一線の外科医としての強烈な自負が窺えた。これまで葉月の身近にこれほど真摯な態度で、仕事に取り組んでいる男はいなかった。憧れ

が恋愛感情へと変わるのに時間はかからなかった。が、はなから諦めていた。女としての自分の価値は、自分が一番よく知っている。知的だと言われることはあっても、決して美人とは言われない顔立ち。痩せすぎで丸みのない身体。可愛げがないと陰口を叩かれ続けてきた自分が、啓介の心を捉えられはすなどないと思った。

「青山さんは優秀だし、すごく強い人だね」

啓介にそう言われたとき、やっぱり、と思った。一人の人間として、研究者として彼は自分を高く評価してくれている。それは恋愛感情とはかけ離れたものだった。そんな啓介に対し、自分が憧れを抱いていることすら知られたくない。そう思った。

葉月は火を点けたばかりの煙草を灰皿に押し付けると、ソファの上で膝を抱えた。

それなのに、ある夜、ひどく酔って研究室に現れた啓介は、学生が仮眠を取るソファで強引に葉月を抱いた。何が彼をそうさせたのかは分からなかったし、それで何かが変わると思えなかった。自分は臆病だったのかもしれない。勝てる見込みがない勝負に出る気はなかった。そんな葉月の気持ちを見透かしたように、啓介が研究室を訪れることはなくなった。そんなものだと思ったから、恨む気にはなれなかった。キヤンパスで偶然、啓介の姿を見かけるたびに胸が痛んだけれど、自分から彼に声をかける気はなかった。拒絶されるのが怖かったのだと思う。

啓介が再び葉月の前に現れたのはそれから一ヶ月ほど経^たってからだった。

——公子と離婚したから結婚しよう。

啓介はそう言つて、婚姻届を差し出した。

戸惑いながらも、葉月は結局、啓介の申し出を受け入れた。自分の気持ちをごまかすことは、もはやできなかつた。好きなものは好きなのだ。啓介はきつと外見や表面的な優しさで女を判断するような人間ではないから、自分を選んでくれたのだと自分に言い聞かせた。拒否する理由も見当たらなかつた。そうして葉月は啓介と暮らし始めた。少し悩んだけれど、旧姓の青山、という名を捨て、仲沢葉月となった。

結婚してから半年ほどはただ楽しかつた。独りでないということが、幸せだということを知つて知つた。互いに仕事が多かつたから連れ立って遊びに出るようなことはなかつたけれど、日曜の夜、アルコールを手に一週間の出来事を報告し合うとき、実験が長引いた冬の夜、啓介の体温で温まつたベッドにもぐりこむとき、言いようのない幸せを感じた。彼が頻繁に息子に会いに行つてゐることは知つていたけれど、息子の身体が丈夫ではないことも、大学内の噂^{うわさ}で漏れ聞いていたからたいして気にはならなかつた。大切なのは啓介が自分のものだということだけだった。

それなのに今はどうだ。

葉月は新しい煙草のパッケージの封を切った。

いつからだろう。啓介は笑顔を見せなくなった。昔のように帰宅後、感染症の最新の話を知ることがなくなった。病院での人間関係について相談を持ちかけてくることもなくなった。帰宅すると放心したように一人で考え込み、葉月を寄せ付けようとしないう。もともと口数が多いほうではなかったけれど、さらに無口になった。そして葉月と目を合わせようとしなくなった。

啓介の態度が変わった原因について、心当たりはなかった。心当たりを見つけられない自分が情けなかった。二人で穏やかに暮らしてきたつもりだった。言い争いをしたことすらない。それとも気付かぬうちに啓介を怒らせるようなことを自分はしていたのだろうか。ほんの些細な不満。それが積み重なり、いつしか深く暗い溝となったのだろうか。

後悔しているのかもしれない。

苦い思いが込み上げる。

幼い息子と妻を捨てたことを啓介が悔いていることが態度の変わった原因だとしたら、自分は途方もなく惨めだ。それとも、誰か別に好きな人ができたのだろうか。考えるほど気分が重くなってくる。

葉月はこめかみを指で揉むと、目を閉じ、ソファの背もたれに身体を預けた。

玄関の鍵が回る音がした。かすかに軋みながらドアが開く。小さな咳払いに続き、足音が聞えてきた。足音は寢室の前を通りすぎ、リビングルームへと向かっていく。

葉月は寝返りをうつと、耳をすませた。浴室の扉を開ける気配がしたかと思うと、勢いのいい水音が響いた。水滴が浴室のタイルを激しく叩く音だ。

水音がやむと、戸棚を探る音がした。足音が廊下からキッチンへと向かう。背中を少し丸め気味にした啓介の後ろ姿が目に見え浮かぶ。

冷蔵庫の扉を閉める音がした。

プシュツという音は缶ビールのプルタブを引っ張る音だ。続いてテレビの音が低く流れてきた。最近、よく耳にする発泡酒のコマーシャルソングだった。

葉月は身じろぎもせず天井を見つめ続けた。

啓介はなにを考えながらソファに坐っているのだろうか。テレビに見入っていると思えない。機械的に缶ビールを口に運び、喉を潤しているだけのよう思えてならなかった。きっと啓介はうつろな目をしている。やや細く黒目がちな目は、映るものを見ていない。見ようとしていない。

彼の頭の中にあるのは、仕事のことだろうか。別れた前妻と息子のことだろうか。いずれにしても自分のことは啓介の頭のなかからすっぽりと抜け落ちてしまった。たとえ今、ベッドから抜け出して啓介の隣に坐つても言葉一つかけてはこないだろう。ふいにテレビの音が消え、ゆっくりとした足音が寢室に向かつて近づいてきた。葉月は寝返りをうつと、部屋の入り口に背を向けた。

電気もつけずに部屋に入ってきた啓介は、薄い夏蒲団ふとんをめくると葉月の隣に体を横たえた。ベッドのスプリングがかすかな音をたてる。

葉月は暗い壁をじっと見た。闇に慣れた眼は普段は気付いたこともない細かな傷を見て取ることができる。

隣からは啓介の息遣いが聞えてくる。それと同調するようにクーラーのファンが低いなり声をあげている。マンションの前の通りを車が走りぬける音がした。

葉月は覚悟を決めて、啓介の体に腕を伸ばした。

「ねえ」

かすれた声には、哀願するような響きが混ざっていた。

啓介の首筋に唇を寄せる。少し汗ばんだ肌は、雨上がりの庭土の匂においがした。慣れ親しんでいたはずの匂い。ずいぶん久しぶりに嗅かいだ気がする。

「まだ起きていたのか」

低い声で啓介は言う、葉月の手首をつかんだ。ゆっくりと、しかし確実に葉月の手を引き剥がしていく。その動きに逆らうようにさらに身体を寄せたが、啓介は身体をよじって葉月に背を向けた。

「明日、早いんだよ。お前もそろそろ秋の学会に向けて忙しくなる時期だろう」「だけど……」

喉元まで出掛かった言葉を、葉月は飲み下した。

啓介が声を荒らげてくれれば、言い返すこともできる。しかし、啓介はまるで薬を飲みたがらない患者を諭すように冷静で、取り付く島もない。

救急車のサイレンの音がかすかに聞えてくる。

顎まで引き上げた夏蒲団の端を噛んだ。嗚咽がもれないように歯を食いしばる。それでもまぶたの奥から滲み出す涙まで止めることはできなかった。

啓介は自分の体にしっかりと蒲団を巻きつけると「おやすみ」とつぶやいた。

返事をする気になれず、カーテンの影が天井に描き出す幾何学模様を眺めた。隣からは規則正しい啓介の息遣いが聞えてくる。息遣いは次第にゆっくりとしたものになり、寢息に変わった。明日の朝、啓介はきっと何事もなかったように「おはよう」と